**いわてこどもエコクラブ　サポーターズミーティング**

日時：2018年2月17日（土）

場所：盛岡市遺跡の学び館　研修室

参加者：事例発表者3名／一般参加14名

主催：環境学習交流センター（NPO法人環境パートナーシップいわて）

●プログラム

第1部　事例発表　13:30～15:10

①特定非営利活動法人紫波みらい研究所　橋浦様

②NPO法人イーハトーブ里山水棲生物保存会　菊池様

③三陸自然学校大槌　臼澤様／東京海洋大学　藤沢様

第２部　情報交換会　15:15〜16:00

●対象

•こどもエコクラブサポーター

　•こどもの自然体験に携わる、関心のある個人、団体

　•エコクラブを作りたいと考えている個人、団体　等

●環境学習交流センター　センター長　野澤挨拶

一番雪の降った時期にお集まり頂き感謝している。全国的にエコクラブは衰退している。多様な活動の立場から、フリーでお話しいただきたい。

一昨日の低炭素杯で遠野緑峰高校が遠野のホップを使った紙作りの取組みを発表しグランプリを受賞した。生産者、開発者、学校などと連携し農業に貢献する取組みである。現在3年目で後輩達に受け継ぎながら、まさにESDの教育に合致したやり方で進めている。今月1日文部科学大臣からも表彰を受け、農業生産者の意欲もかきたてている。学生の大会では評価されていなかったが、高校生の環境甲子園では最優秀賞。全国ユース活動発表でも環境大臣賞を受賞した。色々な人が関わりながら進めていく教育が必要になってくる。

●事例発表①　特定NPO法人紫波みらい研究所（橋浦氏）

2000年景気が良かったころに発足。以前は岩手県で一番赤字が多い街だった。紫波町は自然豊かな町であり街づくりの一環で考えられたことが環境への取組み。環境、人材、資源、街づくりのための環境調査を行い、住民参加での街づくりに繋げる活動を行った。調査を集計した結果、このままの自然豊かな町が良いとの意見が多かった。

前身の団体は一旦解散したが、市民の立場で街づくりをと言うことで紫波みらい研究所が発足。現在の主な事業は環境循環PRセンター運営事業、子ども向けの事業、エネルギー関連事業等。環境学習事業としては子どもの環境学習体験→純石鹸コネコネマイ石鹸作り、エコバッグ作り等の体験学習。また、環境団体や衛生組合連合会、環境マイスターなどと、紫波エコ連絡会を結成し、イベントを開催。

自然体験では森のようちえん『りんくる』を実施。未就学児を手付かずの森で遊ばせる。ルールがあり、なんでもダメと言わないように、自分達で気付くように遊ばせる。子ども達は楽しいものを自分達で探す。大人より目線が低く地面から色んなものを発見する。小学生以上を対象にした環境探検隊では、沢登りも実施。デジカメを持たせて自由に撮影、何に気付いたかを発表した。

　その他國學院大學の里山づくりプロジェクトも実施。学生達が自然の中で自分達を見つめる体験。卒業後、移住し森林組合に就職した者もいる。地域づくり協力隊で現在も5人が活躍している。

団体の持っている課題

・運営資金、特に人件費の確保。補助金などがない

・事業を増やしたが収束させるタイミングが難しい

・スタッフの高齢化

・活動が忙しい為、スタッフのスキルアップができない

・新入会員の確保、若い世代の参加が難しい。望んでいることが聞けない

・情報発信…ブログ、FBを見てもらう機会がない

・森のようちえんに関してはブログを見ての参加者が多いがほとんどが盛岡から。紫波町の参加者が少ない。

・ネットワーク作りはなかなかつながらない

課題のほうが多い状況である。

●事例発表②　NPO法人イーハトーブ里山水棲生物保存会（菊池氏）

メダカとトンボの保全が当初の目的。花巻空港の建設のために土地を削った場所1.7haを重機で整備し、生き物が住める場所、子ども達が触れることが出来る場所としてため池を作った。メダカは北限の黒メダカで地元の小学校のため池などにも提供。生協ゆめコープと連携した活動も行っている。青森県おいらせ町にサイカチの苗を贈呈したことも。

基本的には親子一緒に、自由奔放に遊ばせる。ザリガニ釣りや350ml缶を使ったご飯炊き等。難しかったが大変好評で、夏休みに企画して欲しいとの声もあった。

印象的だった出来事はザリガニについて子供から質問があった事。アメリカザリガニは外来種であり、ザリガニ釣りの後は処分する。子供の感覚では同じ命である。非常に胸が痛かった。

タナゴの繁殖にも力を入れている。産卵の際必要なヌマガイを増やしたが、サギに食べられてしまう。ヌマガイの確保も難しくなっている。地域の小学校と共に記念行事としてドングリの森作りも。ドングリを拾い、育苗、移植した。しいたけの原木に使う木を持ち込みカブトムシの産卵場にし、カブトムシの保護も。神楽の権現。栃の木でなくてはダメだが、栃の木がなくなってきている。直径45CMほどで使えるようになる。次の世代に使えるように残しておく必要がある。池荒らしにあった事も。宮城ナンバーのトラックが近くに止まっていたよう。網を入れられ生き物を根こそぎ持っていかれた。管理地の看板を設置、対策をしている。空気と水、環境に弱い動物を次の世代に残してゆきたい。

●事例発表③　三陸自然学校（臼澤氏）

大槌在住。小槌大明神、カンナガラの紹介。大槌町小鎚にある臼澤鹿子踊保存会館は郷土芸能の保存のために、市民が設置した。伝統芸能の継承と発展、三世代交流による青少年の育成、地域への貢献と心豊かなふるさと文化の創造を行っている。

　鹿子踊りは茨城、千葉近辺発祥。小槌神社への奉納は1600年代から受け継がれている。大人や大きな子ども達が躍っていると、小さな子どもが見よう見まねで踊り、継承されていく。9月の大槌祭では町を練り歩く。

鹿子踊りで使われる鹿のたてがみはドロノキのカンナガラである。厚さ0.7mm。40～50年物のドロノキのみが使われる。真っ白で節がないものしかたてがみにならない。良い質のものは100本に2本以下でたった2%。「神の森ろどのきプロジェクト」は、ドロノキを人工的に植樹、管理、伐採、枝打ちし、カンナガラに使えるドロノキを効率よく生産する取り組み。プロジェクトをきっかけに、町内の5団体が始めて合同で踊った。ドイツ、ベルリンとも協力。ドイツでは苦しいとき、リンゴの木を植える風習があるという。

　三陸自然学校の宣伝。大槌たすけあいセンターでは海鮮春巻きを作っている。素材として使っているバジル→畑の恵み、海鮮→海の恵み、電気（風力発電）→風の恵み、と大槌の自然のすべてが繋がっている。

●東京海洋大学（藤沢氏）

　自然体験プログラムについて卒業論文にまとめたものが発表。沿岸の復興には地域住民が自発的に行う内発的復興が必要と考え、豊かな森川海を活かした地域づくり教育、自然体験プログラムを考案する際に必要な事を調査しまとめた。

●意見交換（進行：櫻井）※敬称略

野澤…小岩井に54年間在籍。ビオトープ協会所属。

高橋…雫石町在住。企業在職時はISO担当。印刷会社にいた関係で、FSCの森林認証を取得。環境の観点から認証紙の普及促進に従事。岩手自然ガイド協会設立準備会では子ども達を自然の中で遊ばせる活動をしている。今の子どもは4年生以降スポ小が盛んで、外で遊ぶ時間が少なく環境・自然体験をする環境がない事が残念である。雫石環境パートナーシップ代表として、チョウセンアカシジミの保護活動は、蝶の保存だけでなく、木（トネリコ）の保存、地域の保護、地域住民の育成が必要と考える。

渋谷…岩手県立大学教授。環境省にいた当時、エコクラブの担当をしていた。事業仕分けの際に国の業務から切られてしまったのが残念。資金の減少、人口減少と高齢化が進んでいる。SDGs＝持続可能な開発の為のゴール、ESD　＝持続可能な開発の為の教育。ゴールが定まった事で環境以外との連携にもやりやすくなってきた。うまく使って頂きたい。岩手県立大学でザリガニの駆除を検討している。ザリガニ駆除の話もあったので、一緒に面白い取り組みをやりたい。

白畑…北上川フィールドライフクラブ代表。全国の学校から年間修学旅行生2～300名受け入れている。岩手の子どもは学力が全国最低である。子供がクラブ活動、スポ小に通っている率が95％。全国的に異常な数値。夏休みの自由研究など、のびのびできないのでは。ドイツの子どもは18歳で家を出なければならない。子どもは国の子どもだという考え方。色んな体験をして、自分でやらなければならないという体験から育っていく。岩手の子ども達は、自己的、総合的な考える力が弱まっているのではないかと感じる。近年観光も「見る」から「体験する」に変わってきていると感じる。田瀬湖でワカザキ釣りをはじめた。限界集落の活用を提案している。

工藤…森林インストラクター会所属

菅原…岩手東芝エレクトロニクスからジャパンセミコンダクターに名前が変わった。ISO14001、環境CSR、コミュニケーション、社会貢献活動など、広範囲に亘って環境保全を担当している。攻めの環境活動に取組んでいる。岩手大学の梶原先生からの紹介で参加した。。

谷藤…シェアリングネイチャー協会所属。ネイチャーゲームは自然体験を深めるツール。アクティビティの組合せによって、公園でも校庭でも、参加者の層にも関わらずどこでも体験できるプログラムである。ネイチャーゲームを通じて自然に関心を向けてもらうのが目的。指導者の育成、プログラムの提供も行っている。

津嶋…鹿妻穴堰土地改良区所属。農業用排水路の維持管理をしている団体。地域の自治会と水生生物観察会を行う。小学校４年生の副読本に記載、施設見学に年間40団体ほどある。

佐々木…盛岡市環境企画課。平成26年にエコアス広場ができた。年20回程度、環境学習を開催。水と緑の街もりおかを未来につなぐ。

坂内…網張ビジターセンターは十和田八幡平国立公園内にある。月2回程度、自然ふれあい行事を企画。参加者はシルバー世代の参加が多く若い人が来ない。昨年度から親子のみの行事を企画。今年も6回ほど実施。集客、安全管理などを知りたい。

佐々木剛…東京海洋大学。藤沢氏の指導教官。岩手の自然は素晴らしい。自然と共存した生活が脈々と生きていると感じる。品川の子ども達を連れて自然体験をさせた。子供たちは自然とのふれあい方が分からなくなっている。

東京では水が汚くて自然観察は到底できない。岩手なら川の水がそのまま飲めるくらい綺麗。北上高地から水、森があり川があり、魚や植物も豊富でモノを買って来なくても住めるほどだと思う。自然の価値の発信は難しい。海外のシステムとの連携を模索している。